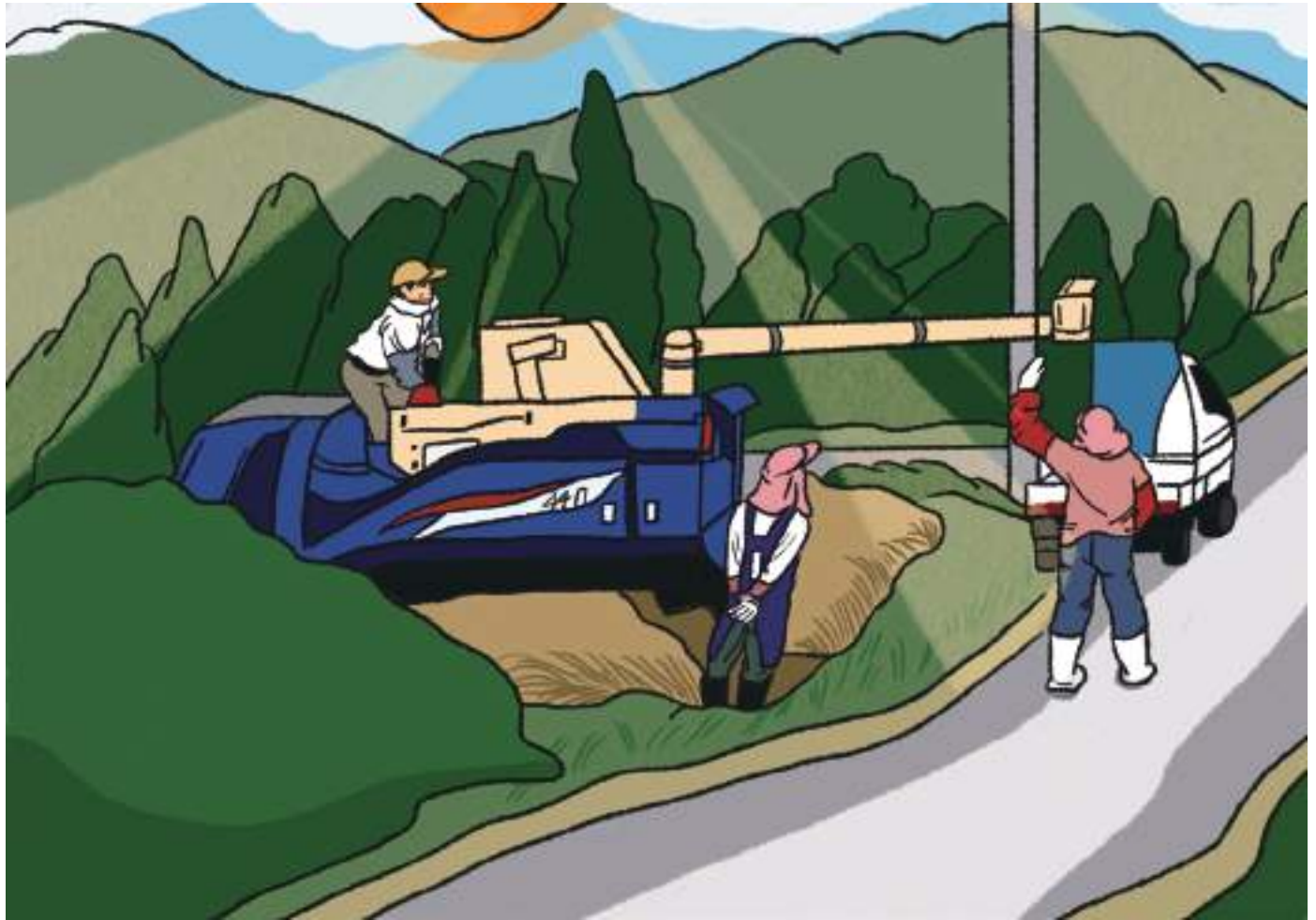




Information

根羽村役場  
長野県下伊那郡根羽村2131番地1  
Eメール:soumu4102@nebamura.jp  
電話:0265-49-2111(担当:総務課 鈴木・杉山)



---

# ネバー ギブ アップ

～とある村の話～

---

ここには都会の当たり前がない。

毎日報道される感染症もないし、  
華やかな看板も、道端のゴミもない。

映画館やカラオケもない。  
それはそれは静かな村だ。

でも、ここには都会にないものがある。

家の庭や畑をきれいに整える日々。

夜な夜な村民が集うおじさんの家。

長い年月をかけて、角が丸くなった岩。

生き物たちの鳴き声が響く、穏やかな夕暮れ。

不便そうに見える生活の中に、

豊かさが顔を覗かせる場所。

ここは根羽村。



根羽村は面積の92%が森林で覆われている。

そこから滲み出た美しい水は、  
下流域に住む人々の生活を支える大切な資源だ。

そんな森と水を守るため、  
昔から村民は、林業に従事して暮らしていた。

しかし、時代の流れの中で、  
村は変化を余儀なくされてきた。

木材の価格は下落し、  
数十年かけて育てた木が、  
今ではたった数千円に。

林業業界は縮小し、  
人の手が入らなくなったことで森は荒れていく。

仕事が減った村を後にして、若い働き手は村外へ。  
気づけば人口は、ここ40年で三分の一に。

きっとこれは時代の流れなのだろう。  
そう言い聞かせて、衰退に従うこともできたはず。

でも、根羽村は諦めなかった。

自分たちに何かできないだろうか。  
一緒に生きてきた森を、別の方法で活かせないだろうか。  
そうやって、今でもチャレンジを続けている。



根羽村の活動の源は、  
いつでも村民の願いから始まる。

「盆踊りをもう一度盛り上げたい」

「耕作放棄地を増やしたくない」

「自然を活かした特産品を作りたい」

「下流域の人と連携して森を豊かにしたい」

「孫とテレビ電話で話せるように、タブレットを覚えたい」

「子どもたちが遊べる森のテーマパークをつくりたい」

やってみたいことを少しずつ形にしてきた。

一つ、また一つと増えていく成功体験が、

他の誰かの背中を押していく。

「最近の村の変化が楽しいから、

長生きするために健康を気をつけてるよ」

とあるおじちゃんは、こんなことを語ってくれた。

外から見れば、過疎化した村かもしれないけれど、  
中に住む人たちは、この場所に希望を見出している。





美しい森と、豊かな水。  
そして、村民の誇りを守り続けるために、  
これからも、根羽村は歩みを進めていく。

木の繊維からつくる布。

子どもが喜ぶ、大きな木のおもちや。

養液栽培で育てるトマト。

牛と共に山を整える山地酪農。

おばあちゃん達による、オンライン味噌作りワークショップ。

これらは、昔からある里山暮らしの恵みと、  
新しい発想を掛け合わせた可能性の種たちだ。

数年前から、村で新たに掲げたコンセプト

「NEVER FOREST いまだかつてない森」を胸に、  
いまだかつて誰も試したことのない方法で、  
目の前の壁を乗り越えていく。

未来は変わり始めている。

ネバーギブアップ。

根羽村はあきらめない。

この源流域で生きる全ての人と、  
子ども達の未来のために。  
私たちは、森とともに生きていく。

# 根羽村の ここ10年の主な 取り組み

SDGsという目標が定められる前から、この村は持続可能な未来をどう作るかに常に向き合ってきた。きっかけは平成初期。社会全体で市町村の合併が各地で発生した際に、この村は単独で存続することを決めた時だろう。人口は減り、村の基幹産業である林業は衰退することは目に見えていた。しかし、厳しい未来から目を背けるのではなく、受け入れた上でどう生き残れるのか。その時代の常識に囚われるのではなく、村として手に入れた未来から逆算した一手をたくさん行なった。決してすべて成功したわけではない。たくさんの失敗があった。しかし、一番大事だったのは失敗を恐れず歩みを止めなかったことだと思う。



## 森林組合の木育活動

根羽村森林組合で森林整備だけでなく、森の啓蒙活動を目的にした「木育活動」も長年にわたって行ってきました。箸作り、わっぱ作りなどの木製品作りから、林業体験や間伐体験など林業員の仕事を体験するような現地プログラムも実施し年間累計参加者1万人に対して木に触れる機会を提示しています。



## 山地酪農

根羽の山地酪農では牛が本来の性質として持つ特性を活かし、365日山と自然の中で共生する酪農を2017年より全国初、自治体支援の元で実現させています。牛は野外で昼夜通年過ごし、山林や耕作放棄地の草を食べながら生活。山林の下草処理の手間も省けるため、中山間地域の荒廃をくいとめるのに一役買っています。



## サステナブルな森づくり

根羽村は、矢作川の源流に位置する水源の村として、村域の森林の違法伐採や、保護する価値の高い森林の伐採を防ぎ、持続可能な森林経営を行っていくために、森林管理のためのFM (Forest Management) 認証、木材の適正流通・加工の認証であるCoC (Chain-of-Custody) 認証を2017年に取得しました。



## 義務教育学校の開校

学校教育法改正により、2020年度から創設が可能になった小中一貫学校。2017年度から村では検討を行い2020年4月に根羽小学校と根羽中学校が統合して、1年生から9年生までが学ぶ根羽村立義務教育学校根羽学園になりました。自然に囲まれた環境を活かした教育に力を入れ、愛知県安城市からの親子山村留学の受け入れも行っています。



## 信州大学農学部との連携

2011年より信州大学農学部と根羽村は地域連携協定を結び、根羽村の持つ地域資源の優位性のある活用方法を見出して、村民主体の持続可能な村づくりを推進しています。森林と里山の総合的な活用モデルの確立及び水源林とそれに関わる下流域との交流・相互発展並び等で連携・協力をしています。



## 矢作川流域での連携推進

人口減少、集落の空洞化が進む根羽村の未来に、山に人の手が入らなくなり、山が崩れ、水源地が守れなくなる可能性が危惧されています。日本の原風景である「ふるさと」を無くさないために、流域沿いの企業や自治体と連携をしながら源流地である根羽村に人が住み続けられる環境持続を共同で行っています。

# 数字でみる 2020年度の 根羽村の成果

コロナウイルスによる緊急事態宣言が出された2020年4月、その瞬間から当初予定していた計画はほぼ全て白紙に。いつ終わるのかわからない日々が続き、高齢化率が50%を超える村だからこそ、警戒意識はどこよりも高かった中で、ただただ毎日できる最善の行動を繰り返した1年だった。そしてその1年を数字で振り返ったとき、とても嬉しい成果が数多く見られた。人口に至っては平成以降初の社会増が見込まれ、山村留学制度・外部人材の雇用・関係人口の創出など、村として力を入れてきている活動に対して、実績を残せた1年だったが、今年度だけでなく、これまでの日々の積み重ねによる結果だったと思う。

## 19世帯 46名

移住者数(トライアル移住者含む)

- 20年度より始まったトライアルハウスが移住促進施策となった
- 村としては平成以降初となる社会増となる見込みとなった

## 6世帯 (2021年度予定)

山村留学世帯数

- 2019年度よりスタートした制度
- 20年度はSNSを積極活用
- 昨年度より5倍の申込となった

## 40記事

根羽村の活動の取材掲載数

- 新聞に年間35記事掲載
- WEBメディアにも5記事掲載
- 多くが教育にまつわる記事
- オンライン活用も注目された

## 県外17団体 県内4団体

村づくりに関わる事業者数

- 企業との関係人口作りを推進
- 流域沿いの企業・自治体との連携も
- 観光・介護・ものづくりなど幅広いジャンルでの連携が行われた

## 新規5名

地域おこし協力隊活動人数

- 農業、林業でそれぞれ20年度4月より活動
- 映像を活用したPR担当が20年度6月より活動
- 教育、観光に1名ずつ21年度新規活動予定

## 4社

地域活性化企業人導入数

- 教育魅力化、ICT推進で1名
- 村全体のSDGs施策推進で1名
- 観光事業の新規立ち上げで1名
- 木の布プロジェクト推進で1名

## コロナ禍での新しい試み

### オンライン婚活

コロナ禍を踏まえ、リアルではなくZOOMを活用したオンライン婚活を開催。村内の独身男性7名と移住に興味がある村外女性6名のマッチングイベントを開催した。

### 高齢者向けタブレット講座

生涯学習の一環として、高齢者の村民から「孫とテレビ電話ができるようになりたい」という要望を踏まえ、タブレット教室を開催。定員10名があつという間に埋まる大盛況な企画となった。

### 野菜のおすそ分け定期便

根羽村に来村したことのある人を対象に、毎月1回、村民のお野菜を詰めた野菜のおすそ分け便を郵送。地域の小学生が書いたお便りと共に、25世帯の方々に源流で育ったお野菜を送った。





## 杉の木からつくる繊維「木の布」プロジェクトを多方面に展開中

大阪府に工場を構える株式会社和紙の布との事業連携を結び、杉の間伐材から木の布繊維に加工できる技術を活用、新たな木材資源の活用方法を創出しています。すでに同技術で商品を展開している株式会社いろどり(徳島県上勝町)と提携を結び、木材から作るタオルの

製造/販売を進行中。原料の一種である「木糸」は和紙の製法を元に開発された希少な技術を用いてつくられた糸です。環境に配慮されたサステナブル繊維として今後様々な商品で人々の日常に木の布を届け、環境保全活動を進めていきたいと考えています。



## 森を活かした「教育サービス」の展開

これまで森林組合が中心となっていた出張型の木育活動に加え、根羽村のフィールドを活かし、自然の中で感性を育む子ども向けの教育サービスの展開を進めます。森林が92%を占めるこの村の恵みと文化を活かしたプログラムを通じて、新たな事業創出も目指します。



## 子どもの個性を輝かせる 村独自の教育システム

柔軟に子どもの個性を育てる教育環境を学校のみならず村全体として作っていきます。ICTの推進・教育コーディネーターの採用・コミュニティスクール、地域活動と連携した総合学習の実施など、枠に捉われない教育体制を推進していきます。



## 学生がつくる「森のテーマパーク」

2019年度、内閣府主催のSDGsまちづくりコンテストにて根羽中学が「森のテーマパーク構想」を掲げ、全国の中学で唯一優秀賞を受賞しました。この構想ベースに、2020年度より実際に中学生にテーマパーク実現に向けた森づくりを共同で行っていき、構想実現に向けて活動していきます。



## 村民×デジタル施策の推進

根羽村の学校では文科省のGIGAスクール構想に基づき1人1台タブレット配布を21年度より行いますが、高齢者世代に向けてもタブレットを活用したデジタル施策の推進を計画しています。高齢者がデジタルを活用できるようになることこそ、充実した福祉支援の実現が可能となります。

# 根羽村が目指す これからの 新しい日常



### Information

根羽村役場  
長野県下伊那郡根羽村2131番地1  
Eメール: soumu4102@nebamura.jp  
電話: 0265-49-2111(担当: 総務課 鈴木・杉山)

「時代の変化が、この村の追い風となっている」というと、ちょっとカッコつけすぎているかもしれない。が、2020年の数字成果にも表れている通り、これまで植えてきた種の施策が着々と芽を出し実になってきている。だから、何か劇的な変化を行うのではなく、ここ10年で培ってきたことを土台に、風のながれを読みながら前進し続けることが大事だ。根羽村の施策で大事にしたいことは常に「村民ファースト」。

村民がこの村で豊かに暮らす上で課題となっていることを、最先端の技術もときには取り入れながら、温かみを持って解決していくことを、これからの未来も大切にしていきたい。